

審査の結果の要旨

氏名 高山 緑

本論文は、老年心理学における知恵の概念に焦点を当て、欧米における知恵研究を踏まえた上で、知恵の我が国における測定法の確立と知恵のモデルの提案を行おうとするものである。

本論文は、10章から成るが、第1章は導入であり、第2章と第3章は理論編として第I部を構成し、今までになされた研究のレビューにあてられており、第3章から第10章までは、調査編として第II部を構成している。

第3章、第4章及び第5章は層別二段抽出された20歳代以上80歳代に至るまでの成人1,264名に個別面接を行なうことによって得られたデータに基づいて、「知恵がある人」とはどのような人として捉えられているかの分析と、知恵観の因子分析を通じて知恵のイメージの解明を行なっている。心理学においては、古くから知能や人格特性といった構成概念が因子分析と呼ばれるデータ解析技術と密接に結びつけられ、それらの構成概念を測定していると考えられるデータの因子間の構造についての知見が、理論の発展に極めて重要な一翼を担ってきたという事実がある。本論文の第5章においても、知恵についての因子分析が共分散構造分析の多母集団比較の技術を利用して行なわれ、男女別の低年齢群と高年齢群の4つの集団に4つの因子が共通して表われること、及びそれらの4因子の中の1つ「知識・教養因子」は、欧米での先行研究で報告されている論理的思考因子とは、対応づけが困難であることが見出された。

第6章から第9章では、都内高齢者大学の60歳から86歳までの在校生及び卒業生197名に、やはり個別面接調査を行なうことによって、Baltesらの人生計画課題と人生回顧課題を用いた知恵の測定法の翻訳改訂版の信頼性と妥当性を確認した。その上で、知恵の年齢による横断的差異を調べるとともに、知恵に影響を及ぼすと考えられる要因について、種々の分析を行なっている。まず、知能検査の結果から、従来の知能の加齢研究における知見と同じく、高年齢者の動作性知能の低下と言語性知能の性差が見出されたが、知恵の下位尺度得点及び総合得点においては、不確実性の理解で年齢による差異と性による差異が見出された以外は、おおむね年齢や性による差異は認められず、60代から80代半ば頃までの知恵平均得点の横断的安定性が示された。加えて、日常的活動能力と知恵得点との相関が認められることによって、日常的活動が知恵を高める上で有効であることが主張された。また、この調査結果の分析により、欧米における先行研究とは異なって、人生回顧課題において相対的に知恵が知能や社会的知能との関わりを弱める反面多様な性格特性との関連を示すことを見出し、今後の比較心理学的研究の必要性を論じている。

以上のように、本論文は我が国における知恵研究のための測定法を確立するとともに知恵の特性に関する研究の出発点ともなるべき知見を提示した。よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいと判断された。